

ねこの みこの

猫類通信

第 2 4 号

平成 8 年

(1996)

7 月 1 5 日 発行

(年 4 回 発行)

「付け」と「付味」

東 明雅

今度、富山の大会の応募作品を審査して感じた事が二つある。まず第一に募吟が歌仙形式であった事、従来の国民文化祭では審査員の労を省く意味で、半歌仙が主であったが、今回、歌仙を採用してはじめて連句というものを完全な形で審査する事が出来た。ことに連句の芸術性の重要な要素である一巻の展開、序・破・急、ヤマ場を完全な形で審査することが出来、大変ではあったが、一種の満足感と充実感を味わったことである。

それにしても歌仙六百三十巻を審査するのは大仕事である。皆さんが一所懸命、苦心して作られたものであるからと思つて、こちらも目を皿のようにして読むのであるが、なぜこの句がこの前句に付くのだろうかなどと考えると、だんだん分らなくなつて、頭が錯乱

し朦朧となつて来て、遂には眠くなつて来る。かくてはならじと頑張るのだが、また五巻か十巻も読まぬうちに頭が混乱して来る。だから、そんな時は「猿蓑」の「市中は」の巻か、「鶯の羽も」の巻などを取り出して読むことにした。これらを一度読めば忽ち頭の混乱もおさまり、眠気も吹き飛んで行くのは不思議だった。これは鬼殺しみたいな強い酒ばかり呑まされ悪酔していた体が、灘の生一本を呑んで生き返るようなものである。とに角、現代連句一般の付け方は難解で、まだ成熟していない。これが第二の感想である。

考えてみると、芭蕉やその一門が、精魂を込めて励んだのは、連句の付けに関するものであった。余情付(句い付)という画期的な手法を発明した芭蕉が、その実作にあたっていかに厳しい指導を行なっていたか。それは「去来抄」にくわしく書き残されているが、私どもはどれほどの努力と苦心を払ったのだろうか。忸怩たるものがある。

私自身、連句は「付け」と「転じ」を双輪とする文芸であると認識しながらも、この「転じ」というものの存在が、連句をして世界の文芸に比類のないものとする特徴であると考え、「自」・「他」・「場」の区別による手法を採用して、現代連句を本当に連句の名に値するものたらしめるように努力して来たつもりである。その考えは決して誤ってはいなかったが、勢い「付け方」の研究はやや

等閑にした感じがないではない。

また一方において、現代詩人達に依る連詩なるものが流行して来た。その先駆者を私は松本の信大連句会の有力メンバーであった高橋玄一郎氏(一九〇四―一九七八)であると考えている。同氏は前句に全く反する、極端に異なったものを付句とする方法に「矛盾付」という名前を付けられたが、これは西脇順三郎氏などが考えられた詩の手法にも似通っており、遠く遡れば藤原定家などの「疎句に秀句多し」という考え方も共通するものはなからうか。これらの影響も大きいと思う。詩の世界だけでなく、俳句の世界にもわけの分からない句を作る、いわゆる前衛俳句が流行している。そう言えば、抽象絵画・前衛彫刻、それらは世紀末の現代芸術全般に共通した傾向であろう。しかし、詩にせよ、俳句にせよ、絵画にせよ、彫刻にせよ、それらはすべて、個の芸術であり、見る人・聞く人が分かる方が分かるまいがそれは勝手である。しかし連句は連衆という複数の作者による作品であるから、すくなくとも連衆の間だけに、十分理解されることが必要であろう。去来は「付句は付かざれば付句にあらず」と言っている。とも角私は今後、「転じ」とともに「付け」にも連句研究の重点を置き、芭蕉の付け方を再吟味するとともに、現代連句にふさわしい新しい付け方と付味を考えていきたいと思うのである。

伊那の辺

根津美紗

朝日輝く駒ヶ岳、夕日に映ゆる仙丈の、高嶺の山の・・・伊那小学校校歌冒頭の部分である。明治生まれの人から伊那小学校に通った人は必ず唱える歌である。わが家は全員が伊那小だから、当時大合唱をしたものである。伊那の地を表すのにこれ以上のものはない。かといって、子供の頃じっくり山々を眺めたわけではない。相当年をとってから眺めるようになった。人生に苦しさが加わるようになって、山々の美しさも増してくるようになる。年をとるに従って、身に迫る恐ろしさも知るようになった。駒ヶ岳も仙丈も、見る場所によって姿が大きく変わる。

一雨ごとに雪が少なくなっていく山。青空がのぞくようになると雪は姿を消し、山は夏の姿になっていく。万緑という語がぴったりだ。そして秋は山の上の方からやって来て、里の紅葉が日ごとに染まり、錦を織りなしてくる。

とくに雪形の島田娘が出る頃は、若葉の美しい季節である。島田の髷と顔が少し小ぶとりに露出して茜色に染まるとさらに美しく、ほほえましい。そんな頃になると種まきが始まり、苗代作りが盛んになるのだが、今は農協が一手に引き受けて風情がなくなった。き

つと島田娘も淋しいにちがいない。千畳敷カールの駒形、南の方には「稗まき爺さん」という雪形を見ることができ、火山峠の方からも趣が異なる姿を現して、人々を楽しませてくれる。

いろいろな雪形が西にはあるが、東には聞いたことがない。元来すぐがないので知らないことが多い(すく≡気力)。火山峠には「濃く薄く酔ふてもどるや紅葉狩り」の芭蕉の句碑が松の木の下に泰然と立っている。

仙丈は北沢峠までバスで行き、駒ヶ岳はロープウェイができて誰でも簡単に登れるようになった。ハイマツの緑と朝のご来光は今も目に焼きついている。

蜿蜒南に流れつつ太平洋の波に入る天竜川の瀬音・・・いまこの天竜川は鮎釣りが盛んだ。腰まで水につかり、東の間の涼を楽しむのだろうか、堤防の上に車が並び、流れの端に行列ができる。Fさんのご主人はプロ、うま煮、塩焼き、鮎めしと賞味させてもらっている。

昔はこの川で泳いだなああと、感懐にふけることもある。急流の天竜川はあばれ天竜といつて恐れられたものであるが、護岸工事が完成しいまは穏やかである。諏訪湖から流れてくる水におののき、なぜあんな汚れた水でと知らない人は思ったりもするが、伊那の七谷といつて木曾山脈から流れ出ている川がいくつもあり、たくさんの水がそがれているの

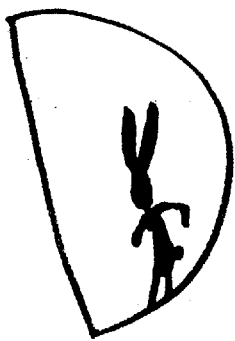
で下の方に行くほどきれいだということである。ああよかった。鮎釣りの人の多いのも故あるかなである。

釣れる魚は鮎はもちろん、アカ魚や鯉なども釣れ、竿を振って一度に二匹も三匹も釣れるそう。釣り天狗たちは目方を競い、優勝だとか二位だとかいって楽しんでる。

天竜川をはさんで東西の段丘は、伊那の穀倉地帯として野菜や米でうるおっている。とくに米は、品質のよい伊那米として売り出すために農家は一所懸命だ。農薬を使わないおいしい米を提供している。

連句会でなかなか句が出なかったりすると、東先生はよく「伊那の蜂の子飯とかあるじゃないですか」とおっしゃる。もしかして先生も蜂の子飯がお好きなのかも知れない。

伊那を語るのに自然とゲテモノは切ってもきれないようだ。ざざ虫、さなぎ、イナゴ・・・なんだかもぞもぞして来た。編集の佛淵さんには悪いけどこの辺でご放免頂こう。らつきょうの塩漬も日が過ぎてしまったから。



連句と出会う

紺野 千寿子

東先生の御著書「連句入門」を読んだのは十年以上前だった。

その頃わたしは週一、二回のジョギングをしていた。というのもアルバイトをしていた出版社で、かなりの割合でジョギング熱が高まっていたからで、しまいに総勢三十人が四日間かけて「日本横断駅伝」をしてしまうという凝りようだった。

まず先発隊が道の下見をし、全員の体調をチェックし、それぞれに合ったコースを一日五キロずつメンバーに割り当てた。一人一人のペースを考慮した上で予測した走行時間は、分単位の誤差にまで迫るものだった。

皆の足を引っ張っては大変だと、私も一年がかりでひそかにジョギングをし、体調を整えたのだった。

スタンドプレアの成り立たないスポーツ「エキデン」が世界語になったように、文学においても「レンク」があるのを知って、日本の文学を誇りに思ったものだった。

が、連句に関わる場がこんなに多くあることを知らなかったわたしは、何の疑いもなく俳句を始めた。連句と俳句は違うもの、というのが連句にたずさわっての印象。連句をよく知ることが、当面の課題である。

連句紀行

田上 昌恵

きっかけがあって、俳句、短歌、川柳、詩、小説と漂泊する旅をしている。

またこうした文芸への興味と別に、外国人に日本語を指導するボランティアもしているが、日本に来ていては各国の人々が仲良く交流するのを見ていて、政治の絡まない庶民と庶民の相互理解の大切さを痛感している。世界の人と積極的に仲良くなるのに、文学

に関わりのあるやり方はないかと思っている時、連句を知った。インターネットで英語を使って連句をやればと、そんな突飛な夢も抱いて、朝日カルチャーセンター連句教室の戸を叩かせて頂いた。

入会してみると、連句は決まりごとが多く、知らないことが山盛り。難しくて毎回目をぼちくりさせている状態。俳句、短歌、川柳などの要素も含まれていて、教室の皆様の知識

の広さと連想の闊達さには圧倒されている。目下の悩みは、教室で先生方の講義を伺えば何うほど、日本的情緒を見る思いがし、これは果たして英語になりうる文学なのだろうかという疑問である。

とにかく分からないことだらけだが、元氣だけはあるので、連句の魅力をさらに自分なりに掘り下げていきたい。

ささらえ男に花言葉

ささらえ男、八足兎、玉蟾、陰精、嫦娥・・・というのは何？ というのはクイズの中では難度の高い質問かも知れない。答え、全部「月」の別名。

発句に「正月」「睦月」といった「月」の字が出てしまった場合、月の定座では「月」の同字を避ける、と教わるが、このときが「異名の月」たちの出番。月という字を使わない月である。他には「銀盤」「玉兎」「金精」「桂男」といったものがある。

月よりもややこしいのが「花」。連句は花の句を詠まないといけないが、「正花」とさされているものを詠まないと花の句を詠んだことにはならない、というのが厄介である。

「花の宿」「花明かり」「花衣」「花便り」といった言葉は普通に使われる春の「正花」である。他に他季の正花といって、夏、秋、冬にも花の句に使える言葉がある。夏(余花・花氷・花火)、秋(花相撲・花灯籠)、冬(返り花・餅花)、歳旦(年の花・花の春)などがそれである。さらに雑(無季)の正花というものもある。花嫁・花婿・花鯉・花言葉、等である。波の花・花野・風花といった食指の動く花があるが、これらは「似せもの花」といって、花の句にはならない。残念。

ACC式田和子講師の講義より構成
(H)

執筆の役を終えて

上月 淳子

昨年(平成七年)の末か三月の始めでした。東先生から「次の執筆を」とのお電話を頂き、全く思いもかけぬこととびっくり、何と御返事してよいやら一瞬絶句という有様でしたが、生来のおっちょこちょいと、走り出してから考えるという癖で「お受けいたします」とお答えしてしまいました。

さて、それから前の執筆の方のビデオを拝見しますと、今まで人ごとの様にぼんやり見ている時と違って、皆様の所作の堂々としていらっしやること、踊りかお仕舞の所作の様に優雅に流れる様な形、朗々たる吟声、改めて感心してしまい、これが私に出来るかしらと落ち込んでしまいました。でも「お受けいたします」と申し上げた以上、落ち込んでばかりはいられません。暑い夏をひたすら手順を覚えることに専念し、先輩執筆には及びもいたしません。せめて間違えないこと、吟声はとて難しいけれど、私なりにははっきりと皆様に聞き取って頂けることを第一に心得てお稽古いたしました。

いよいよ平成七年十月十八日第十六回芭蕉忌当日、孝子宗匠の「執筆、執筆」と声がかかった時は緊張で頭の中が真っ白になる様な思いでしたが、何とか練習通りに手足が動き

ほっとする思いでした。時々ちらちらと先生のお顔をのぞきますと、「うん、うん」という様に頷いてくださり、それで段々と落ち着きを取り戻した様な気がいたします。やっと曲がりなりにもつとめて元の仮座に着いた時は、ほっと大きな溜息を付き度い様でした。

さて今年の藤祭りは例年になく寒い日が続き、藤もまだ一分という位でした。風邪も流行いたしまして、私も直前に人並に風邪をひき心配いたしました。天神様のお蔭か、当日は元気で勤めさせて頂きました。知司の和弥様のお声の御立派なこと、お花の芍薬の見事だったこと、二度目になると少し落ち着きますのか、印象的でした。

さぞかしはらはらしながら見守って下さった先生、沢山の御助言をして下さった式田和子先輩、姿勢をよくして落ち着いてゆっくりと励まして下さった内田麻子さん、共にお役を勤めて下さった方々に改めて感謝いたします。

その昔には連歌所もあったという由緒ある亀戸天神社で猫簞会も連続八回も正式俳諧を奉納でき、また今後も続くことと、会のみますの発展を共に祈り度いと思えます。

五月十三日に藤祭りの作品を先生を始め捌きの方々とともに天神様の神前に奉納し、献盃の盃を上げた時、無事一年間の身にあまる大役がすんだことを実感いたしました。

初めての役(配硯)

八代 編

昨年(平成七年)十月の俳諧芭蕉忌と今年四月の藤祭正式俳諧興行に配硯の役を仰せつかり貴重な経験をさせて頂いた。

九月初めの稽古では、明雅先生、和子先生そして諸先輩方が熱心にくり返しご指導下さった。配硯役三人の動作を揃えること。進左退右。起右座左。硯の扱い方。お辞儀の仕方等々。にも拘らず、いざ本番となると右だったか左だったか考え始めるとパニックになってしまい、誠に教え甲斐の無い弟子であった。しかし、またそこで思い直し、(狼狽えてはならぬ。とりあえず滑らぬよう、痺れが切れぬよう)と唱えているうちに会場の雰囲気にも不思議なほど馴染んでいた。

作品が満尾し、執筆の文台返し、納硯、知司の閉会の挨拶、連衆礼。ふっと緊張が解かれたこの刻は、今思い出しても実に爽快だ。その後の二十韻の席で明雅先生が握手をして下さった時には、ああ終わったのだ、という充実感が湧いてきた。

思えば四年前、亀戸天神藤祭で初めて正式俳諧を見学し、「こんな世界があったのだ」と、興奮を覚えたものだった。そんな私が、この度配硯として興行の一員に加えていただけたことに深く感謝申し上げます。

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧

藤祭り奉納俳諧興行

二十韻「藤祭り」 東明雅 捌

次第 役割

一	席入	宗匠	坂本孝子
二	配硯	脇宗匠	雑賀遊
三	献花	執筆	上月淳子
四	執筆呼出し	知司	権頭和弥
五	文台捌き	副知司	須田智恵
六	俳諧興行	座配	五味蓉子
七	花前	座見	同
八	玉串奉納	花司	梅田利子
九	花の句披露	香元	八角澄子
十	端作り	配見	浅賀淑代
十一	吟声	同	吉村恵美子
十二	文台返し	同	八代 嬢
十三	作品奉納	老長	副島久美子

平成八年四月二五日

於 亀戸天神社

二十韻「藤祭り」

連歌所の跡はいづこぞ藤祭り	明雅
亀も鳴くとや太鼓橋際	遊
春の服色とりどりに着こなして	和弥
気長に相手ピアノレッスン	蓉子
ガレ洋燈月にぼっかり灯らせる	利子
行水名残細腰の影	澄子
頬の疵すさまじあれぞ恋敵	恵美子
小道具係に指示を細かく	淑代
地下鉄の切符売場に列長し	智恵
木枯しのなかおろすシャッター	久美子
スパイクの枯芝まみれラガー達	シズ
二料単位で地震計置き	良彌
山麓に農園拓く定年後	路子
車座になり水論の月	文字
冷酒の酔にことよせ抱き締め	暁巳
くどき落とされ遂に還俗	庸子
印度洋船室のぞく信天翁	瑞枝
色鉛筆で絵はがきを描き	嬢
窯出しの皿にも受けん花ぶぶき	孝子
もてなされ居る菜飯田楽	執筆

平成八年四月二十五日

於 亀戸天神社

藤祭り晴れをよろこぶ池の亀	明雅
鶯の琴聴くほろよひの耳	啓子
春の炉に読みさしの本読みつぎて	利子
土産話に笑ひはじまる	英二
シルクロード天山山脈月涼し	澄子
恋のザイルに繋がれしピア	同
宇宙服独逸娘を射留めたる	同
こっそり喰べるお茶漬の味	啓
二十年納所坊主の味噌をすり	澄
山色溪声みな仏なる	二
美術館大観びいきの自慢顔	同
団子芋坂口笛の月	利
吸血鬼襟につけたる赤い羽根	同
モデルメイクで彼は彼女に	同
抱き上げてぎっくり腰の老夫婦	啓
出るに知られぬへつつひの猫	同
雷魚の沖は時化るる日本海	澄
細道の夢しのぶこのごろ	同
乳母車音なく巡る花の苑	雅
又ガーをしゃぶる涎あたたか	啓

平成八年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 岩井啓子 梅田利子 日高英二 八角澄子

二十韻「藤日和」

今宮水壺 捌

二十韻「藤房」

加藤道子 捌

二十韻「藤浪や」

神谷安子 捌

賑はひや天神様は藤日和

牛の鼻づら撫づる春風

しゃぼん玉隣町まで追ひかけて

海でひろった石を文鎮

子と酌める月のさし入る厨窓

野の秋草の壺にあふるる

地芝居の女形のしぐさ忘れかね

恋かきたつる鴝の甲声

ワーキングホリデイビザで若者ら

やっここ底の見えた円高

屋上へのっぺら坊の雪だるま

非常用品どこに置くのよ

リストラの進めば増ゆるノイローゼ

猫と箴言慣るるべからず

僕と居て君何を泣く夏の月

汗が乾けばもはやお別れ

ど演歌が夢と港の稚内

父母に濁点爺と婆なり

釣り上げし魚の目にある花曇

ふらここ高く漕ぎあぐる空

藤房をかき分け見たる社かな

笙筆築に和せる囀

染付けの皿に菱餅重なりて

額を寄せ合ふ兄と弟

夏の月ジーンズの膝ぼっかりと

蚊遣りめぐらし慕情つづれる

あのひとは友達の妻片想ひ

ハッチ閉ざしてノアの方舟

放射能汚染されたる山羊の乳

鍼灸院に予約たのみて

初孫と四温日和の縁に座し

町の池にもかいつぶり浮く

写真機を据えて進める車椅子

ピアノ聞こゆる秋さびし刻

酔ひの覚め女衾ま顔の月の間

老猫さやか大欠伸する

古文書を読む愉しさのいやましめ

スイッチポンで沸かす温泉

訪ふ人も一期一会と京の花

遠く近くに揺るる陽炎

藤浪や古曲の琴の糸調子

春風駘蕩値千金

初もろこ母に教はり焼くならん

つかまり立ちの嬰のまつはる

夏安居の明けの帰りの往持寺

香水つよき女待たす月

黒き肌光りて胸のあへぎをり

象の檻にはくり返すデモ

山彦の一声だにも届かざる

恩給生活する水洩

クリスマス大パーティーを開く友

壁に耳ありドアに鍵穴

睦言もはじめちよろちよろ中ぱっぱ

縛り縛られ愛咬の果

月一片長安万戸砧打つ

夜光の杯に新走り酌む

オリンピッククテップ切る人爽やかに

鳶の輪ゆるく島々の影

墨堤をそぞろ歩きの花万朶

夢の彼方へ揺らすふらここ

平成八年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 倉本路子 島村曉巳 原田千町

秋山志世子 和田順子

平成八年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 佛淵健悟 中島啓世 五味蓉子

中村ふみ

平成八年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 式田和子 水鳥ますみ 中野昌子

木村真呂 山崎一恵

二十韻「江戸囃子」

佐藤良彌 捌

二十韻「兩國囃子」

篠原達子 捌

二十韻「藤祭」

橘 文子 捌

藤浪や江戸の囃子も心地よく

黄を輝かせ舞ひ出づる蝶

大振りの栄螺常節海女桶に

旅誘へる電話かかり来

国境に衛兵集ひ望の月

秋の袷のままで追っかけ

肉体の悪魔しづめてそぞろ寒

剣菱の香を受ける大盃

拝殿の裏に棲みつく猫のボス

九時からならぶパチンコ屋前

雪吊を老いたる木より順々に

児に水漬の落ちたるたそがれ

松園の絵は佛の母なりし

秘密包みし風呂敷を抱き

夜這ひくる歩荷をこぼむすべもなく

月に叫びし鳩のひと声

オークション思ひもかけぬ高値つき

同窓会にふたたびの夢

千年の時のおぼろに花万葉

しゃぼんの玉に浮かぶ七色

藤浪のゆれて兩國囃子かな

鳴くこと忘れ甲羅干す亀

初節句雛人形を飾るらん

名入りのケーキお土産にして

あはあはとビルの間なる月涼し

みめ美はしき羅の女

流眊にこころ射抜かれ添ふことに

遊動円木行きつ戻りつ

七転び八起き泣いたり笑ったり

鬼ごろしてふ酒をぐい呑み

困にベダルきしませ帰る医者

インターネット暖房の部屋

故郷訛り同期の会の盛上り

焼けぼっ杭にぼつと火がつき

野暮天が恋に狂って月に吠え

なにもそなはず露のみ仏

にこにこことポランティアより赤い羽根

ジョギングシューズ仔犬まつはる

楊貴妃に鬱金閑山花ざかり

夢のごとくに立てる陽炎

連歌所に神遊びしや藤祭

春蟬ゆるく鳴き初むる頃

紙風船幼なの頬もふくらみて

丹念に読む厚きカタログ

月皎々キングスロードのショッピング

洒落た小袋匂ふ焼栗

秋扇細りし胸をそつと見せ

鮫肌磨く絹の垢すり

碁仇に勝てず不貞寝の旦那様

ナイター沸すジュニアひと振り

ロケ現場長く裾引く夏の富士

捨て弁当に野良犬の寄る

非加熱剤居丈高なる老教授

病氣承知で済ます入籍

トリストアン・イズルデの船牙ゆる月

尼僧の辿る雪の崖道

切々とおわら流るる故郷よ

右にはドコモ左ハンドル

報酬の続きいや増す花の酔

広き野面に百千鳥翔つ

*ドコモ 携帯電話

平成八年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 坂本孝子 吉村あみこ 日高玲

豊田好敏 市野沢弘子

平成八年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 東郁子 雑賀遊 加藤治子

氏原正雄

平成八年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 上月淳子 近藤守男 久保田庸子

松本碧 萩原てる子

二十韻「藤陰に」

椿 紀子 捌

二十韻「風狂」

峯田政志 捌

文音「亀鳴くや」

藤陰に菅丞相の烏帽子かな

紀子

風狂の喬なごやかに藤祭

政志

亀鳴くや海竜王寺破れ土塀

秋元正江

笙の音色に春惜しむ頃

シズ

木彫の鸞を飾る床の間

嬭

池面に揺るる芽柳の影

東 郁子

耕しの労ねぎらひて和やかに

和弥

一番茶葉をきりきりと揉みあげて

久美子

春暖炉子らの合宿賑やかに

東 明雅

一気にあける炊立ての飯

瑞枝

月光に竿のアロハの翻り

代々子

宵の月ジョッキ重ねて人を待つ

江 郁

ハイウェイミラーに光る冬の月

美奈子

人魚戯むる小さきハモニカ

淑代

巴里の裏町小さき愛の巢

江 郁

息白くしてウイと答へる

かりん

潤む眼にまたもうつとり浮気虫

美 生

手鏡に息ふきかけて紅をひく

江 郁

検事をやめて弁護士となり

ん

王妃お相手このたびは誰

生

鳶輪をかく燈台の上

江 郁

リウマチはアメダスよりも当たるとか

枝

鉄条網門までの道はるかなる

嬭

神の潮来島の瀬戸泡立ちて

江 郁

爪切りそっとしまふポケット

弥

時雨降るなかお百度を踏む

美 代

携帯電話急に取りだす

江 郁

外寝する宇治十帖の昼下り

同

サポーター得点に沸くロスタイム

代

襪市の掘出物に夢託し

江 郁

蚤をふるってのびをする犬

枝

床屋の亭主好きな井

淑 代

竈からでて欠伸する猫

江 郁

麻雀のぼんを拾って尻はしより

弥

天竜の流れ滔々秋深み

同

独り者TVに向かひ話しをり

江 郁

彗星だよと座敷わらしが

ズ

熱き抱擁月に恥ぢらふ

美 生

菊の枕に慕ふ移り香

江 郁

月皓々世界を巡るフルムーン

同

葡萄酒を醸すが如く恋を遂げ

代

亡霊と契る幾年月も瘦せ

江 郁

石榴の味のそれぞれの恋

ん

ほっと安堵の血糖値なり

生

かりがね渡る秋成の墓

江 郁

秋狂言三代続賞を受け

奈

老いし母薬缶につけし焦がし癖

嬭

古稀の旅過ぎ来し方を語り合ひ

江 郁

力いっぱい投げける直球

枝

柱のきずは兄の落書き

生

やさしい自然に触れて飲む水

江 郁

野に出て曼陀羅見たり花大樹

紀

花あかりシャルウイダンス軽やかに

淑 代

借景の吉野は花の真盛り

江 郁

臙々に遠き山脈

ん

レトリバー引く麗かな丘

代

風に靡ける芋棒の旗

江 郁

平成八年四月二十五日 首尾

於 亀戸神社

連衆 小野シズ 権頭和弥 大窪瑞枝

鈴木美奈子 登坂かりん

平成八年四月二十五日 首尾

於 亀戸神社

連衆 八代嬭 副島久美子 橋野代々子

本田弥生 浅賀淑代

平成八年三月二十二日 起首

同年五月二十二日 満尾

現代連句論のための序章 (2)

高橋 豊美

教室で作文を、ありのままに見たままに書いてみなさいと言われて、困ったことはないだろうか。「言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず、只ありのまま見たるままに某事物を模写するを可とす。」(『叙事文』正岡子規) 写生とは、自分にも良く分からぬが十年二十年続ければ分かるかも知れぬと言ったのは、虚子である。

鶏頭の十四五本もありぬべし 子規

病床の囁目の句だが、勿論この句の詩的リアリティを支えているのは、子規の内面であり肉体であって、十四五本にリアリティがあるかどうかではない。或いは、「『瓶にさす藤の花ぶさみじかければ畳のうへにとどかざりけり』といふのは、止みがたき作者の主観の声であることに人々は気がつかない。」

(『短歌に於ける写生の説』斎藤茂吉) この歌には長い詞言があり、「それ等を同時に合せ味つて、はじめてこの歌の佳作である事を心から感得したといふことになる」(『子規の歌一つ』同上) つまりこの歌のよい読者は、正岡子規のその生涯についてその病氣について知らなければならぬ。ここに近代文学を指摘した俳句や短歌の陥った陥穽がある。

「正岡子規は写実を実行したけれども、

『写生』の語義を説明するに、『手段』などと無造作に云ってゐる。予等を以てみれば、

『写生』は手段、方法、過程ではなくて総和であり全体である。」(『写生といふ事』同上) 茂吉は作歌活動の全部が写生の実行であるとし、ただし写生の概念、定義に説明と注釈を繰り返すことは禁物である、「この写生説を信じようとするものはこの定義をそのまま直覚的に体感するやうに練習すべき」(『短歌初学門』同上) と言っているが、虚子の言に通じるものがある。この写生論は日本近代文学(明治の自然主義)のマニフェストと呼べるものである。

わが国の近代文学の主流はロマン主義的告白を自然主義的リアリズムでおこなうと言う妙な文学で、我々は十九世紀西洋近代文学をそのように矮小化して受容した。「ここで彼等にとって『自己』と『文学』と『自然』とはほとんど同一視されたので、作家自身の感性の動きをできるだけ精細に再現することが、『自然』の表現であり、それが『文学』の『文学』たる『第一義』であつたのです」(『風俗小説論』中村光夫 以下引用同書) この彼等とは私小説の作家達のこと。「当時の私小説の秀作が小説というよりむしろ作者の人間修行の報告書たる観を呈し(中略)それが僕等を動かすのは(中略)独善的な修行に身を委ねる作者の熱情の純粹性と激しさによってです。」瑣末な日常生活の描写は精細

を極めることで社会性を喪失し、読者を仲間内の文壇とその周囲にのみ求めた。仲間同士の告白がその帰結である。肥大したナルシズムが文学であるような通念が今もある。

十九世紀西洋文学がそのようなものでなかったことは、ゾラをみても分かる。

日本の近代化の過程で、それに応えあるいは反抗する形で、近代的自我の確立の方法として、近代文学はあつた。それは近代資本主義的価値観の反映とならざるをえない。しかも西洋文明の圏内に入るのには、西洋文明の後進国になるということ、その歪みは、現在にいたるまで私達に影を落としてゐる。

十九世紀西洋近代文学は、ロラン、バルトの言う「作者」の誕生によって象徴される。その孤独な作者主義、獨創性重視、非歴史主義、伝統否定等は、西洋文学の歴史においても、万葉以来の日本の文芸の歴史においても、異例で特殊な文学観である。

二十世紀文学は、十九世紀文学批判によって始まった。二十世紀文学を総括する時期にある今も、わが文学に「写生」の理念が生き続けているがゆえに、現代連句は俳句から峻別されなければならないのである。

では、俳句は駄目なのだろうか。

例えば、丸谷才一が「この貫禄なら蕉風歌仙の発句が立派につとまるだらう。」(『現代俳句から古俳諧へ』)と褒めた句。

山々のうしろは露の信濃かな 龍太

季語はるかなり

諏訪欣二

俳句や連句をするものにとって、季語は欠かせぬものである。歌の題がゾルレンで、俳諧の季題はザインであるといわれている。日本語を使う我々にとって、季題の歴史はあまりにも長く、不動のものである。しかし、よく見てみると、どうも日本列島は南北に長過ぎて、季語の感覚に一月も二月もずれることがある。京都を中心に東西に走らせた線が、日本の文明の中心だったせいだろう。

ところが、近代に入り、宇宙規模に人間が動くようになると、独りよがりの蛙では終わることができなくなる。どこかの夏季圏に居るとき日本は冬季圏であったとする。日本語を使う私が、自分の詩情を五七五をもって表現するとき、ふと夏のところにいるのに、冬の季語を使って詩情を詠ってもよいものか、またその逆の場合もある。そのときのザインに正直でありたいというのが自分の真情である。船乗りであったころの下手な句を参考に。

一九六八・一二・二八(土) 大阪湾
旅立ちや月冴えわたる茅葺の海

四日でも身も心も冬から夏へである。
一九六八・一・一(水) ルソン沖

初日の出平和祈願のルソン沖

鏡餅三日もたぬ暑さかな

我々にとって正月は正月である。

同 二・四(火) リオデジャネイロ
節分や地球の裏の夕立浴び

節分と夕立が同居である。さてどうか。

同 二・二六(水) 米・ボルチモア
頬をうつチェサピークの雪はげし

頬を上る。風雪が厳しい。はや冬だ。

同 三・六(木) アメリカ東海岸南下
あすはもう薄着せねばと南風

身も心も季節に順応させるのが難しい。

同 三・十一(金) パナマ運河
焼畑に万緑さびしバナマかな

同 四・三(木) 太平洋・日本に近し

ぼりばあ丸遭難地点の南方百十マイル
この春を知らずに友は逝きしかな

日本の四季に合わせたいと思ひ季語を句に詠みこむにしても、カレンダーを頭からはずして、今いる世界のザインをとらえて詩情を詠むのが一番いいようである。我々日本人にとって季語は誠に贅沢な言葉である。季語を使うことよって身も心も引き締まるのである。間合いを持つ日本語のシュールな心象に

役立つ季語は、時代の変遷があつても、四季の移り変わりを子々孫々受け継いできたものである。遠隔の地にいると、これを切実に感じる。連句に戻るが、季語の扱いに矛盾を感じたとき、雑というものの生き場所を、一巻に見出したのが私の大きな収穫であつた。

連句と酒 *

「あなごとせう」

中川 哲

土用の丑の日といへば、鰻が定番になつてゐる。だが、その日を休みにするといふ臍曲がりの麻布「野田岩」では、秋口まで「白焼き(しらやき)」を食べさせてくれない。旬ではないからといふことらしい。ちょっと気障っぽくて気に入らないが、たしかにこの時期、脂が乗って旨いといへば、むしろ東京湾のあなごか、夏の季語にもある「どせう鍋」だらう。鰻は夏まで待つことにしやう。

深川芭蕉庵で夏の猫簞会のおとの一杯とくれば、高橋(たかばし)の「伊勢喜」といふことになるか。戦前、福井隆秀はこの裏あたり、講釈場の隣に住んでいたっけ。

それもいいが、この辺の小さい鮎屋で頑固さうな職人に「あなごをあぶって、たればつけないで」と注文をつけられる店があつたら、なほ良いな。

◇猫養会案内

連句会

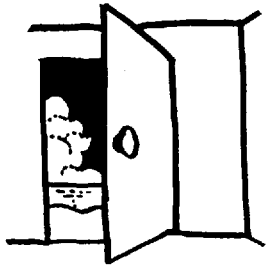
▽深川連句 場所 江東区芭蕉記念館
第一日曜日一時～

▽柏連句 場所 柏市近隣センター
第二日曜日一時～

○猫養会 場所 江東区芭蕉記念館
十月十六日一時～
正式俳諧の後二十韻興行

◎次の方々が猫養会同人に推挙されました。

真田光子 村田富美 浅賀淑代
八代嫺 吉村あみこ 高橋豊美
五味蓉子 権頭和弥



宮脇昌三

杉内徒司

今年三月六日、伊那市の坂下公会堂で芋庵三世根津美紗の立机式があり、「長い間のわたしの任務の一つが終わったような安堵感を覚えた」と宮脇昌三氏が述べている。

これは、昭和三十六年九月二三日、昌三氏の幹旋で実現した根津芋丈の「講演及び実作指導」が機縁となり発足した信大連句会の事等を顧みられての感慨なのであろう。

芋丈没後三十年になるが、その知名度は年々高くなってゆく。芋丈生前の庵号「抱虚庵」は没後二人を経て、現在は土屋実郎連協合理事長が襲名されている。これは連句復興に賭けた芋丈の執念の成り行きからであろうか。これに比べて「芋庵」はさほど広くは知られていないから、三世立机を機会に、毎年伊那で花の頃芋丈忌が出来ぬものか、これも昌三氏にお願したいものだ。

今度の立机式で彼が捌いた二十韻の付句、
厳冬露西亜に墓標残れる 昌三
にも万感の想いが込められている。

昌三氏は東明雅氏と東大国文科同期、関東軍に入隊したためシベリアに抑留され、復員したのは二五年一月。それから長野県下の高校を転々、最後に東京の亜細亜大学教授を勤めた後、故郷の駒ヶ根市に隠退した。

伊那北高校在勤の頃、郷土誌『みず』に「井月の日記」を連載していたが、井月取材のため石川淳が訪ねて来た。このことは、別冊『文芸春秋』（昭和三十一年十月号）に載り、今では『諸国騎人傳』の一節になっている。

坂下公会堂の広い和室で円熟社主催の根津芋丈一周忌追善俳諧が行われた昭和四四年二月十六日は寒い日だった。芋丈翁の勲五等瑞宝章受勲に力添えした故三井武翁の代理として出席した私は特別の敬意を払われたらしく、隣の小室で酒の供応に与かり、昌三氏の接待を受けた。

これが最初の出会いだったが、ある時、「今度『加舎白雄全集』を上梓するが、田舎で出版報告会をやる」と出席者は多いが、内容のわかる人は少ないんでね」というので、私が東京で開くことを引受けた。

この出版記念会は五十年五月十一日、東京新宿の厚生年金会館で開かれたが、席上披露された付廻歌仙は次のような異色の表六句で始まっていた。

夜ながさや所もかへず茶立虫 加舎白雄
月洩れいよよ暗きものかけ 宮脇昌三
初潮も近うなりたる網刺して 安東流火
ごろりと籠に動くとつくり 大岡 信
土にほふ冬芽を町に売りに出る 石川夷齊
墨をえらんで直諫の表 丸谷才一

東明雅

【Q】七部集を読みますと、「雅」と「俗」が上手に織り込まれていると感じますが、現代の連句における「雅」と「俗」はどのようなとらえればよいのでしょうか。

【A】連歌は「雅」の文学でありました。

それを俗にくずして新しい庶民の文学を創り出そうとしたのが俳諧であります。いわば「帰俗」は連歌から俳諧が生まれる契機であり、このために近世庶民の間に大流行して、遂には連歌を衰亡させてしまいました。しかし、その後、自門や談林によって一途に「帰俗」の道を突っ走った俳諧は、進めば進むほど低俗なものになってしまい、遂に行きづまってしまいました。この俳諧の危機を救ったのが、杜甫や李白、あるいは西行の文学精神（「雅」）を取り入れた芭蕉の「冬の日」であります。だから、同じ七部集でも、「冬の日」は最も「雅」の要素が多く、「猿蓑」は「雅」・「俗」の割合が理想的に取り入れられており、「炭俵」になると、「軽み」の主張と相俟って、だんだん「雅」の句は少なくなっていくようになります。

そのあと、この「炭俵調」の模倣を最高とする風潮が俳諧壇を支配し、低俗な作風は止まるところを知らず、世の中に蔓延するに至りました。これを嫌って蕪村が「離俗論」を唱えたのは有名であります。蕪村は安永六年に出版した「春泥句集」の序文に、俳諧は俗語を使って俗を離るるのがよい。俗を離れて俗を用いるのだから、離俗の法が最もむずかしいが、その方法として、漢詩を読み親しむのが一番早道であると教えております。蕪村自身も漢詩・漢文で中国の高邁な文学精神を吸収して浪漫的な作風を示す俳諧を完成し、俳諧中興の祖となったのであります。「もすもすも」・「一夜四歌仙」など、すばらしい作品が残っております。

ただ、この蕪村の俳諧中興も、滔々たる低俗俳諧の流れを改めることが出来ず、幕末にその弊は極に達し、ついに明治二十六年、正岡子規によって、「発句は文学なり。連俳は文学に非ず」と言わしめたのは、当時の俳諧作品の低俗さにその一因があると思われまます。昭和になって復活した現代連句では、以上の俳諧の歴史に鑑み、蕪村の手法を参考に、新しい「雅」を求め、それを作品の中に活かして行くべきでしょう。芭蕉は杜甫・李白、西行・宗祇・雪舟・利休に「雅」を求め、蕪村も漢詩、其角・嵐雪・素堂・鬼貫に「雅」を求めました。

現代連句人はこのようなすぐれた漢詩人・歌人・俳人らの作品は勿論のこと、ひろく東西のすぐれた文学・音楽・絵画、その他一切の芸術の中に「雅」を求めるべきでしょう。

◇ 猫養発展基金にご協力有難うございます。

五千元 鈴木春山洞

一万円 片山多迦夫

二口 卯の花会

(敬称略)

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店
普通3376045 猫養基金

..... § §
あとかき

○ 山上宗二という人の日記に、「我が仏隣の宝 婿舅 天下の軍 人の善悪」とある。茶の席ではこんな話は控えなさいというわけであるが、連句というのは相当胃袋が丈夫なのか、そうした素材も上手に消化してしまおうようだ。連句の後晴ればれた気持ちになれるのは、この文芸の持っている解毒作用のようなものか。

○ 連句の行事がこれから多いですが、暑中お大事にお過ごしくださいませよう。

季刊 「ねこみの通信」第二十四号
発行者 猫養連句会
編集人 〒一九五 町田市金井6-7-6 佛淵健悟
印刷所 アトリエ・Neko